

# 子供に、地域の文化を教えたい

## 標津ふるさと体験塾（標津町）

標津ふるさと体験塾（以下ふるさと体験塾）の塾長を務める武山<sup>よしみち</sup>栄道さんの事務局を兼ねる自宅を訪れると、廊下の壁に所狭しと写真が並べられてあった。大きく引き伸ばして額に入れられた写真が、年代順に並べてある。一番最近のものは、2010年5月16日、第52回の「山菜採り体験」での記念撮影。子供たち十数人と、数人の大人が笑顔を見せながら並んでいる。一番古い写真は2003年10月12日のもの。第1回標津ふるさと体験塾「海釣り体験」の記念写真である。



第1回標津ふるさと体験塾「海釣り体験」の記念写真を指さす武山さん

「これが、1回目ですよ」その写真を指差しながら、武山さんは説明してくれた。

ふるさと体験塾の第1回目は海釣り体験。

参加したのは親子や先生など合計28人で、釣り道具を持っていない子供には、釣り竿やリール、エサまで用意した。3時間ほど釣りをした後、チャンチャン焼きやジンギスカンの昼食を提供したという。

当時のことを紹介した雑誌に、「父親と参加した境直人君（標津小3年）は、釣りは初めて。コマイが釣れて楽しい」と感想が残されていた。

### ■ 地元を知らなすぎる子供たちを危惧

居間に案内されてテーブルを挟むと、まずふるさと体験塾を始めたきっかけについて聞いた。

道外からの修学旅行生を案内する標津町観光ガイド協議会のメンバーであった武山さんは、京都から来た修学旅行生と地元生徒との交流会の場で、地元の子供たちの知識のなさに驚かされたという。

「海釣りでは何が釣れるの?」、「サケはいつ川に上がってくるの?」などの質問に答えられない。「あまりにも地元の子供たちが、地元のことを知らな過ぎるのではないか」。

武山さんは、そう危惧した。早速、同協議

会のメンバーなどにも呼びかけると、みな同じような危機感を抱いていたという。それならばと、地元の子供たちに地域の自然や産業、文化をもっと知ってもらおうという目的で、2003年に「標津ふるさと体験塾」を発足させた。そのときの会員は10人。会員の職業は公務員や自営業、タクシー運転手など様々だったが、釣りや山菜採り、イクラ作り、料理など、その道のベテランばかりが集まった。

そして、同年10月に第1回標津ふるさと体験塾「海釣り体験」を実施した。その後、ほぼ月1回のペースで活動を始めた。毎年少しずつプログラムは変わるが、四季折々の体験メニューを提供している。大体2月にはアイスキャンドル作り、5月に山菜採り、7月には溪流釣り、いちご狩り、キャンプなど。9月はいも掘りとブドウ狩り、10月にはイクラづくりやサケの遡上見学、11月には海釣り、12月には餅つき大会を催している。参加する子供たちは、毎回40~50人。現在の役員は5人。会員は約30人。常時ボランティアの女性が5~6人手伝ってくれるという。



武山さんは、「まず地元の子供たちに、地元の自然について教えたい」と語る。

毎年5月に行われる「山菜採り体験」を紹介した新聞記事(2006年5月14日 北海道新聞)では、「山菜採りも恒例行事で、この日は町内の幼稚園児や小学生51人が小刀を持ち、長靴姿で集合」と、その様子を掲載している。2007年には、さわやか福祉財団(本部・東京)主催のワンモアライフ賞を受賞するなど、その活動は内外にも認められるようになってきている。

### ■ 資金繰りが苦しいのは、当たり前

「資金的にはどうですか」と尋ねると「資金繰りが苦しいのは当たり前。それをこぼすぐらいなら最初から活動をやらない方がましですよ」と、武山さんに言われてしまった。

「体験塾の参加料は1人500円ほど頂いていますが、昼食代が含まれているので、これだけではもちろん足りません。会員のカンパなどで補っています。それに下見の時の交通費とか、連絡費とか、ガソリン代とか、挙げればキリがないですが、ほとんどが手弁当です」。しかし、そういったことは初めから分かっていることで、それを「苦労」だと思わないという。むしろ、「いつも天候には苦労させられる」と言う。

「イベントのとき、天候に左右されるのが一番大変。せっかく段取りしたのに、それがすべてパーになるのですから。何度か失敗した経験から、今では雨のときのための別プランも立てています」

例えばこんな具合にと、9月5日(2010

年)に予定されている54回目体験塾のチラシを手渡された。そこには、「いも掘り・いももち作り体験」と書かれてある。いも掘りは晴れた場合で、いももち作りは雨の場合なのだという。さらに、チラシの注意書きには、「雨天時は、いももち体験を予定していますが、食べられない人はおにぎりを持参して下さい」とまであった。



第52回目の「山菜採り体験」での記念撮影(2010年5月16日)

### ■「ふるさと」を教えるのが大人の役目

「今の子供たちは、都会の子も田舎の子も、家にこもりがち。外にも出ないし、学年が違えば話もしない」

このままだと、わが町、標津の子供たちが自分たちのふるさとを見失ってしまうと、武山さんは強調する。

「自分たちが祖父母などから教わったことを、自分の子供だけでなく大勢の子供にも教えてやりたいのです。彼らが大人になったとき、その子供たちに、ここの自然や文化を伝えることができなければ、『ふるさと』が無くなってしまふような気がするのです」

それに、体験塾では子供と一緒に参加する大人までが見聞を広げているのですと、武山さんは苦笑する。「サケには筋子が腹に入っているのと、イクラが入っているのと2種類いる」と、誤解をしていた若い先生もいたという。

リピーターの子供が多いのも特徴だという。多い子供では40回以上参加している。そんな子供たちを毎回見ている武山さんは、参加者は、「毎回、子供と一緒に参加させてもらっていますが、だんだんと子供が変わってくるように思えます。なんというか、集中力が付いてくるというか」と言う。

最後に武山さんは、「体験塾に参加した父親と子供が、心底楽しそうに話をしているのを見ると、『ああ、これをやって本当に良かった』と実感できますね。そして、『塾長さん！ また次回も』と声をかけられると、やる気も倍増します」と、まるで子供たちの笑顔を思い浮かべているかのように目を細めていた。

### ■ 連絡先

〒086-1652 標津郡標津町南2条東1丁目1-11

標津ふるさと体験塾 代表 武山 栄道

TEL : 0153-82-3751